

清代八股文における八股（提股・出題・ 中股・後股）と收股について（1）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (1)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This essay examines the formal features and rules of the eight legs (initial leg, revealing the theme, middle leg, later leg) and summary leg of the Qing dynasty eight-legged essay. As a result of this study, the following is demonstrated. The initial leg (tigu or qibi) corresponds to the human head. It consists of four or five to seven or eight matching sentences. Revealing the theme (chuti) occurs one or two sentences or three of four sentences after the initial leg. The middle leg corresponds to the human chest. Some middle legs are shorter than the initial leg, some are longer. However examples of middle legs consisting of ten to twenty matching sentences are unusual. The later leg (hougu or houbi) corresponds to the human foot and the human shadow and consists of between ten and twenty matching sentences. It is unusual for a long middle leg to be shortened. The summary leg (shougu or shubi) follows immediately after the later leg and consists of two to three or three to four matching sentences. As for the rules of writing, in general terms, the middle leg utilizes the development of such key theoretical elements as beginning, reception, transition, and combination to discuss key points. This study also shows that the in the later leg a new discussion must be developed.

はじめに

拙稿では、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股（乾隆丙戌〔一七六六年〕刊『文家模範』による⁽¹⁾）

と分類される、清代の八股文のうち、いわゆる八股（提股・出題・中股・後股）と收股とを（1）形式・（2）規則・（3）解法と具体例という観点から検討する。

なお「題目」・「破題」・「承題」・「起講」・「入題」については、「清代八股文の題目について」（『經濟理論』第310号）・「清代八股文における破題・承題について」（『經濟理論』第312号）・「清代八股文における起講について」（『經濟理論』第313号）・「清代八股文における入題について」（『經濟理論』第316号）において不十分ながら考察を試みた。

商衍鑒（一八七五年～一九六三年）は、いわゆる八股の提股（提比）・出題・中股（中比）・後股（後比）・束股（束比）と收股（收結）とを次のように解説する。

八股は、起二比（亦た提比と曰う）・中二比・後二大比・末二小比（亦た束比と曰う）と爲す。但だ二小比 亦た提前の起比（提股）の後・或いは中比の後に用うる者有り。比とは對なり。起・中・後・束の各兩比の内、凡そ句の長短・字の繁簡と夫の聲調の緩急との間、皆な須く相い對して文を成すべし。是れ八股の正格と爲す。起比（提股）以後、出題は一二句或い

（1）ここでは、乾隆三十一年（一七六六）刊『文家模範』によったが、八股文の形式についてはいろいろな言い方や分類がなされている。たとえば、盧前は、

破題・承題・起講（小講）・領題（入題）・題比（提股）・出題・中比（中股）・後比（後股）・束比（多くは束比を用いず）・落下（收股）（『八股文小史』九頁～十頁・商務印書館・民國二十六年（一九三七）刊）。

このように分類する。また、王凱符（一九三四年～ ）は、

破題・承題・起講・入題・起二股・出題・中二股・過接・後二股・束二股・收結（『八股文概説』十七頁・中華書局・二〇〇二年刊）。

とする。

は三四句を以て、下 中比に接す。中比以後、過接は一二或いは三四句もて、下 後比に接す。亦た出題・過接 連合して之を用いる有り。或いは僅かに提比の後に用う、或いは僅かに中比の後に用いる者あり。束比は後比に緊接す。篇末 一二句を用いて收め以て篇を完え、[題目に] 下文有る者は之を落下と謂い、[題目に] 下文無き者は之を收結と謂う。破題より以て收結に至るまで、語意 必ず須く連串（つなげる）すべし。中間の出題・過接 皆な散句を用い、乃ち文義を點醒（要点を示しはつきりさせる）し、之をして一氣相い生ぜしめ、板滯（杓子定規）・轉捩（転じる）・遲鈍（鋭くない）の嫌無く、重複・隔絶して層次（文脈） 清からざる可からず。是れ八股の謀篇（創作）・布局（構造）の大略なり（『清代科舉考試述錄』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節 八股文之文體・二三三頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

いわゆる八股の部分は、「起比（提比）・出題・中比・過接・後比・束比・收結（落下）」のように分けられるとする。起比（提股）・中比（中股）・後比（後股）・束比（束股）は対句を用いる。起比（提股）の後ろに一二句もしくは、三四句の出題を作り、中比（中股）の後ろにも一二句もしくは、三四句の過接を作る。両者を合わせて提比（提股）の後ろか、中比（中股）の後ろに置く形のものもある。束比は後比のすぐ後ろにおく。題目に下文がある場合は落下（下を落す^{のこ}）^{のこ}といい、[截下題のように] 下文がない場合は收結という。

続けて、商衍鋈は次のように言う。

再び分かちて之を論ずるに、唐彪（號は翼修）曰く、「制藝の法に六位有り。頂と曰い、面と曰い、心と曰い、背と曰い、足と曰い、影と曰う」（『讀書作文譜』卷之九・一葉～二葉・「制藝有六位」条）と。此れに據りて以て言え、起二比（提股）は、人の頂と面との如し。意は題前の「部分から」著筆（書き始める）するに在り。全篇の勢いを提起し、每比 約四五句より七八句に至る。鍊（鍛鍊）にして緊なるを要し、中比・後比の地位を留めしむ。中二比（中股）は、人の心と背との如し。當に一步を進めて題中

の反正①・神理の所在するの處を搜剔（探し求める）すべし。筆は鬆靈（輕快）なるを要し、略ぼ提比より長き者有り、亦た提比より短き者有り。其の大開大合②して、情を盡して（思いぎり）題の義蘊を發揮（論述・展開）す。每比の長さ十餘より二十句に至る者は、則ち變格と爲す。後二比（後股）は、人の足と影との如し。題の最後の位置③と爲し、題旨に向いて意の實なる處を立て、暢發（すらすらとして滞りがない）して遺す無し。中比 既に輕鬆（輕やか）を以て之を出すに因り、後比 ^も 若し莊重（謹嚴）踏實（適切）ならざれば、以て全篇の精神を振起するに足らず。文氣 舒長（のびのびとして）にして、每比 多く十餘比より二十句と爲す。倘し中比 已に長ければ、則ち後比 短きこと普通の中比の如くす。〔これは〕亦た變格なり。束二小比（束股）は、每比二三句或いは三四句なり。全篇を回應（呼応し）掲醒して加うるに結束の意を以てする所以なり。後來の八股の格 多く改めて六股と爲すは、則ち二小比を將^もって減去すればなり。（『清代科舉考試述錄』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節 八股文之文體・二三三頁～二三四頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

①唐彪の『讀書作文譜』では、董思白の説明を引用して次のように解説している。

〔反正〕董思白 曰く、反正は乃ち文の大機關（最重要点）にして、知らざる可からざるなり。^{そも}且そも『論語』の中、夫子の管仲を論ずるが如きは、若し之を正言すれば、則ち「管氏 禮を知らざれば、何等 明らかにし盡さん」と曰うに、却って又た「管氏にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん」（『論語』八佾）と曰う。子賤（宓子齊）の賢を尊びて友を取るは、若し之を正言すれば、只だ宜しく「魯 君子多し、故に取る所有りて以て其の徳を成す」と曰うべきも、却って「魯 君子無^{ママ}かりせば、斯れ焉くにか斯れを取らん」（『論語』公冶長）と曰う。此れ皆な反語な

り。惟れ反にして、文 斯れ暢（よどみが無い）なり、と（『讀書作文譜』卷之七・六葉・「反正」条）。

②大開大合（闔）：王允徳の『斯文規範』（康熙五十九年〔一七二〇〕序）に「前面 一大開し、後面 一大闔（合）するを言うなり。反正法と甚だしくは別つ無し。唐翼修（唐彪） 謂う、「開闔（合）とは、乃ち諸法の中に對待（相對する）して、抑揚の致すを兼ね、或いは反正の致すを兼ねる者、是れなり。賓主（a）・擒縱（b）・虛實・淺深（c）の諸法の如きは皆な對待する者なり。對待有りて抑揚・反正の致す無ければ、則ち賓主は自ずから賓主なり、擒縱は自ずから擒縱なり、虛實は自ずから虛實なり、淺深は自ずから淺深なり。開闔（合）と云う可からず。惟だ對待の中に兼ねて抑揚・反正の致す有るは、眞の開闔（合）なり」（『讀書作文譜』卷之七・一葉～二葉・「開闔」条）と。論じ得て細かきに似たり。然れども亦た必ずしも太はだ拘[束]されざるなり」（『斯文規範』卷之三・十五葉・「一曰大開大闔」条）。

（a）賓主：『斯文規範』に「賓とは、客なり。乃ち主人の請う所の客なり。主 必ず客有り、客 必ず主有りて、方に一堂欣暢（愉快的）の樂有り、則ち之を文に通ずるに、凡そ文中 題面を直敘すれば、便ち直率（飾りけが無い）なるを覺ゆ。必ず主 客有り、客 主有れば、則ち文字 方に情趣（おもむき）有り。主客の聚まる處に就與して一堂歡欣（喜び）して暢遂（楽しむ）するに相い似たり、故に之に名づけて賓と曰う。其の客を以て主を^{あら}形わすを言うなり（i）。此の法 處として有らざる無し。故に通篇より論じ、起講・前提・後束もて賓と爲せば、則ち中間・正面 即ち主と爲す。又た正面より論じ、前後もて賓と爲せば、中間の兩大股 即ち主と爲す。更に各股に就きて論じ、股頭・股尾もて賓と爲せば、即ち各股・中間

即ち主と爲す。更に各股の字眼に就きて論じ、兩股の字眼の或いは虚を以て實に對し、淺を以て深に對するが如ければ、則ち上股の虚の字眼・淺の字眼もて實と爲し、則ち下股の實の字眼・深の字眼は即ち主と爲す。處として有らざる無く、即ち文の然らざる無し。知らざる可からず」（『斯文規範』卷之七・七葉・「一曰賓」条）。

- (i) 以客形主：『斯文規範』に「題の重からずして此に在り、是れ客と雖も、我 重からざる者に偏り、埋伏の法を用い、伏 定まり、後面以て之を作し、客 正に以て主を形わすを言うなり。前の「駕輕御重」（「題の實字 軽く、虚字 重く、直ちに題中の實字より虚字の神を發出するを言うなり……」（『斯文規範』卷之三・十四葉・「一曰駕輕御重」条）と名を異にするも實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・二十六葉・「一曰以客形主」条）。
- (b) 擒縱：光緒五年（一八七九）新鐫『初學題類文法合編』に「筆 縱（解き放つ）ならざれば、則ち平直敷衍にして、毫も生氣無し。善く文を爲す者、題の後を籠（包括）し、或いは一筆を縱開す、或いは二比を縱開す。身を題上に置き、俯唱遙吟し、題中の要義（要旨）をして煩言せずして解す。所謂ゆる夏雲奇峯（夏の雲や美しい峯のようなすっきりしたすばらしさ）、是れなり」（『初學題類文法合編』下卷・二葉・「縱筆」条）。
- (c) 虚實・淺深：『讀書作文譜』に「〔淺深虚實〕唐彪 曰く、文章は實に非ざれば、以て義理を闡發（解明）するに足らず。虚に非ざれば、以て神情を摇曳（揺れ動かす）するに足らず。故に虚實 常に宜しく相い濟るべきなり。淺は以て其の大槩

を指陳し、深は以て其の精微を刻劃す。故に浅深は相い離る可からざるなり、と。 又た曰く、浅深・虚實は古今の文の大綱と雖も、然れども其の槩を約畧（大まかに言う）するに四端を出でず。虚より實に入る・浅より深に入るは、俟序（順を追って）漸進（次第次第に進む）者なり。一虚一實・一浅一深は、相間（交互）に文を成す者なり。此の二者 人皆な之を知る。變體に至るに、則ち前幅の實義 已に盡きれば、後幅は虚に駕して空を行かざるを得ず。[そこで] 或いは旁意を襯貼す、或いは餘情を推廣する者あり。前半 刻意（苦心）して深く入れば、後半 復た深くす可き無く、輕描淡寫（軽く描写する）せざるを得ず。[そこで] 或いは古昔を援引す、或いは他事に附帶する者あり。此の二者 人之を知ること少なし。然れども四者の結構（構造） 同じからずと雖も、當理（合理的で）合宜（ふさわしい）なるは、即ち一なり。能く斯の理を悟れば、即ち以て浅深虚實の致を盡す可し、と」（『讀書作文譜』卷之七・一葉・「浅深虚實」条）。

- ③位置：『斯文規範』に「鄭先生 ^{ほ みだ} 曰く、文 位置有り。畧ぼ紊す可からず。起講と起股（提股）とを想うの時、意有りて佳しと雖も、止だ中股・後股に入る可く、起（起講・提股）の處に於いて之を用うる可からざる者なれば、則ち此の意を中〔股〕・後股に留めて起（起講・提股）の處は宜しく別に他意を用いて之を爲すべきが如し。此の如ければ、則ち位置 顛倒し、前後 重複の病無し」（『斯文規範』卷之六・三葉・「一曰位置」条）。

起比（提股）は、人の頭部にあたり、四五句より七八句の対句を作る。中比（中股）は、人の胸部にあたり、起比（提股）より短いものもあり長いものもある。ただし、十から二十句の対句を作るのは変格とする。後比は、人の足と影にあたり、十から二十句の対句を作る。中比が長いと短くするが、それは変格である。

束比は、二三句または三四句の対句を作る。

明代には、最後に大結を置き時事を説くこともあった。ただし、これは、不正の温床となったので、康熙帝の時に禁止された。また、他人と異なったことを示すために、通常の格式を変えて、十比・十二比・十四比・十六比・十八比などを作成したり、兩扇題であれば二大比に、三扇題は三大比に、四扇・五扇題は四大比・五大比を作り、單句題は二大比・三大比にするものがあった。そうであっても、破題・承題・起講・領題・落下（收結）などの作成法は、規定のままであったという。

明人 篇末に大結を用いて、時事に及ぶ可し。世宗（嘉靖帝）の嘉靖二十二年（一五四三）癸卯、葉經（字は叔明、號は東園。浙江上虞の人。嘉靖十一年壬辰科〔一五三二〕三甲二十一名の進士）山東に巡按たりて、鄉試の「無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣」（『論語』衛靈公）題の程文を作り、大結の内に「繼體の君、未だ嘗て承く可きの法無くんばあらず、但だ德 至聖に非ざれば、未だ聰明と作るも以て舊章を亂すを免れず」等の語有り。〔傍系から帝位に即いた〕世宗（嘉靖帝）之を見て大いに怒り、以て譏訕と爲し、逮訊（逮捕尋問）され 杖下に斃る。〔葉經の作った〕按語 並びに急切ならず、而して意も亦た空論なりて、竟に時君の暴威に触る。後より皆な草率（いいかげん）に従事す。而るに不肖の徒、又た毎に此に於いて關節を暗藏す。清の康熙の時に至りて懸（公布）して厲禁と爲す、而して大結 遂に癢る。⁽²⁾八股の體制の異なる者に至るに、十比・十二比・十四比より以て十六比・十八比等に至る有り。亦た雙扇題（二扇題・兩扇題）は兩大比に作り、三扇題は三大比に作り、四扇・五扇題は四大比・五大比に作るの類有り。而して單句題は兩大比・三大比を用いる者間々之れ有り。則ち試場中 人に異なるを求め見^{あら}わさんことを欲するの故なり。惟だ

（2）嘉慶九年『欽定科場條例』に次のようにある。

康熙十六年に議もて准けたるに、鄉〔試〕・會〔試〕の應試するの諸生の文字の中、概して大結を作すを許さず（『欽定科場條例』卷十五・鄉會試藝・二葉）。

其の前後の破〔題〕・承〔題〕・起講・領題・落下等、仍お一定の格式を爲す（『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節

八股文之文體・二三四頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

章中如は、いわゆる八股の提股（提比）・出題・中股（中比）・後股（後比）・束股（束比）と收股（落下）とを次のように解説する。

次提比：亦た起比と曰う。或いは四五句、或いは八九句、均しく可なり。

總じて題前に就きて着筆（書き始める）し、以て中〔比〕・後比の地歩を留む。兩比の字句は相い同じきを要す。

次出題：領題（入題）に比べて一步を進め、全題を將^もって點出（要点を示し出す）す可し。或いは仍お點出せず、留めて中比の後に在りて方^{まさ}に全出する者あり。

次中比：長短 定式無し。兩比の字句は相い同じきを要す。或いは正意を寫^かかず、仍お他義を以て翻騰（様子を変化させる）する者あり。是の如くすれば、則ち後比 應に正義を發揮（論述・展開）すべし。中比に在りて應に正義を發揮するが如き者は、則ち後比 應に題後の義を推し闡^{ひら}くべし。出題 未だ全題を將^もって點出せざるが如き者は、則ち中比の下仍お出題有りて、題の全行を將^もって點出す。提比の下の出題 已に全題を將^もって點出するが如き者は、則ち此の處 再び出題を用いず。

次後比：長短 定式無し。大約 中比長ければ、則ち後比短し。中比短ければ、則ち後比長し。兩比の字句 亦た相い同じ。

次束比：前の六比（題比・中比・後比）の意 未だ盡くさざる有れば、再び兩比を以て收束す。字句 亦た相い同じ。宜しく短かるべし、宜しく長かるべからず。此れ八比の正式なり。亦た束比を用いず、〔八股ではなく〕僅かに六比（六股）に作る者多し。

次落下^{のこ}：落して題の下文に到るなり。如し題〔目〕に下文無き者は、或いは餘波を推し闡^{ひら}く、或いは加えるに結束を以てす、或いは落下無きも亦た

可なり。領題（入題）・出題・落下（收股） 皆な散行なり。亦た偶句を用いる者有り⁽³⁾（章中如『清代考試制度』下巻・文格・二頁・黎明書局・一九三一年刊：盧前『八股文小史』（第二章 八股文章之結構・十頁・商務印書館・民國二十六年刊）もほぼ同じ）。

以下、まず（1）において、清代におけるいわゆる八股（提股・出題・中股・後股）と收股とを個々に解説したものを時代順に並べて、その形式のおおよその変遷を検討してみたい。

（1）形式

（i）『讀書作文譜』

康熙三十一年〔一六九二〕刊『讀書作文譜』で唐彪は、一二股（提股）・出題・三四五六（中股）・七八股（後股）・束股を次のように解説する。

まず、一二股（提股）について、次のようにいう。

〔一二股〕唐彪 曰く、一二股は、通篇の機①・勢②の聚まる所なり。或いは反振③す、或いは順發す。隨宜（隨意）を以て之を用う可し。總じて機を得・勢を得るを以て佳しと爲す。〔題目に〕上文無き者は、題前の意を搜索（探り出し）して之を爲すこと多し。〔題目に〕上文有る者の題前の意已に上文に在るも、必ずしも牽き入れざる者は、必ず之を置（ほうっておく）す。〔題目に上文があるもので〕其れ或いは上文と本題と交界（境を接する）の縫（縫い目）中に意の承く可き者有れば、一二句を帶入す。必ず多くす可からず。敷衍の陋を免る可きを庶幾うなり。大抵の妙處は、題中の一二字を截取するに在り、或いは題理の半ばを截取し、以て之を闡發（解明）し、

（3）盧前『八股文小史』では、「領題（入題）・出題・落下（收股） 多く散行に作るも、一定（かならずしも偶句を用いず」とする。

（4）唐彪、字は翼脩。浙江・蘭谿縣の人。明經をもって會稽・長興・仁和の訓導に任ぜられる。黄宗羲（明・萬曆三十八年〔一六一〇〕～清・康熙三十四年〔一六九五〕）・毛奇齡（明・天啓三年〔一六二三〕～清・康熙五十五年〔一七一六〕）に問學したという（嘉慶『蘭谿縣志』（卷十三 上 文學・四十八葉）による）。

其の機を開き、其の勢を導き、實をして盡くすを嫌わず、虚をして泛（広範）なるを嫌わざらしむは、是れ佳き境なり、と（『讀書作文譜』卷之九・九葉・「一二股」条）。

①機：『斯文規範』に「邵芝南 曰く、文に品有り、機有り。品は譬えるに則ち聖なり。機は譬えるに則ち巧なり。機は手腕の間に存し、意想の表に行なわる。耆宿にして得る能わず、幼學にして之を得る者有り。終日 構思して成る能わずして倉卒にして立ちどころに就く者有り。機 一たび得れば、則ち諸もろの妙 悉く筆下に来り、虚靈變化 備わらざる所無し。昔人 云う、文 妙に入るの時、熟に過ぎるは無し。熟すれば、則ち氣機 自然と流利するなり。生なれば則ち未だ澁滯せざる者有らざるなり。「機」字の正義 此の如きに過ぎず。其れ開闔・抑揚・呼吸を以て機と爲す者有るも、眞に無稽（でたらめ）の論なり」（『斯文規範』卷之六・五葉・「一曰機」条）。

②勢：『讀書作文譜』に「〔勢〕唐彪 曰く、文章 勢を得るに二有り。勢を得るに題を馭するに在る者有り。〔それは〕一題に遇うに他人皆な題位を闡發（解明）するも、我 獨り意を題前に着す、又た題義に輕き有り重き有りて、我 其の重き者に於いて之を詳らかにし、輕き者は之を畧せば、則ち勢を得るが如し。勢を得るは謀篇（創作）に在る者有り。〔それは〕一篇の機局（構成）扼要（要点をつかむ）するに全く起比（提股）或いは單提（前提）に在り、乃ち文の發源の處なればなり。此の處 若し能く勢を得れば、則ち後の諸比 皆な力有り。一股の意 皆な起句より領出す。一線（脈絡）相い承け、兩岐を容れる無し。首句 睽そむげば則ち一股皆な睽く。首句 晦くらければ則ち一股皆な晦し。故に臨文の時、一股の意 已に心に定むと雖も、而れども起句 必ず須く再三選擇すべきなり。〔それは〕勢を得るを求むる所以なり。又た古文を以て之を言えば、制藝（八股文）と微かに異なると雖も、而れども大槩 相い同じ、通篇の綱領は首の

一段に在り、首段 勢を得れば、則ち通篇 皆な佳し。毎段の筋節は首の一句に在り、首句 勢を得れば則ち一段 皆な佳し。文の重きは勢を得るに在り。而して勢の理 是より要なるは莫し、と」（『讀書作文譜』卷之七・十八葉・「勢」条）。

- ③反振：『斯文規範』に「振は、動なり。字面に於いて未だ之を出さず、先ず反筆を用いて以て題中の字面を振動するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反振」条）。

一二股（提股）は、機を得たり、勢を得たりするのを好いものとする。一二股（提股）作成の要点は、題目の一二字を取り出すことや、題目の理の半ばを取り出して、それを解明し、題目の機を開き、題目の勢を導き、實を尽くし、虚を広げることにある。

出題については、次のようにいう。

〔出題〕唐彪 曰く、先輩の點題（題目の要点を示す）地位に拘〔束〕されず、合宜（適切）なれば、即ち點（要点を示す）す。或いは起講に在り、或いは講下（起講の直後）に在り、或いは一二股の中に在り、或いは前に一半を點し、後に一半を點す、或いは寒星（寒空に点々と輝く星のように）分點す、或いは篇末に竟點す。不可なる所無きなり。講中・講下・一二股（提股）の中に在りて點ずる者は、之を先點後做體①と謂う。三四五六股（中股）、及び篇末に在りて點する者は、先做後點體②と謂う。然れども先輩

先點・後點に拘らず、必ず題字を折開③し、層次（段落）にして出す。題面を鎔化し、即ち成句もて出す者有り、亦た必ず上下襯（際立たせる）するに文詞を以てし、題の自ら題し、文の自ら文^{かざ}の弊無きを庶う。此れ其の後人に勝る所以なり。近時の人、點題（題目の要点を示す）の原より定位無く、題に因りて施すを知らず。又た題字を折開し、層次にして出す能わず。又た反點・借點・暗點④の諸法を知らず、坐して一二比（提股）の下に定め、勉強（無理）して直ちに出す。〔これは〕人の項下に一つの瘤を懸綴するが如し。豈に人の目を汚さざらんや、と（『讀書作文譜』卷之九・九葉・

「出題」条）。

①先點後做：『斯文規範』に「先ず題中の面目を點し、而して後に實講するを言うなり」（『斯文規範』卷之四・十葉・「一曰先點後疏（做）」条）。

②先做後點：『斯文規範』に「先ず實實に講了し、而して後に題の面目を點ずるを言うなり」（『斯文規範』卷之四・十葉・「一曰先疏（做）後點」条）。

③折開：『斯文規範』に「折」と「轉」とは相い似て、實は同じからず。「轉」は則ち此の理 已に盡き^つ另^{べつ}に一灣（曲がりくねった流水）を轉づ。別に是れ一番の境界なり。「折」に至れば則ち往復・合離・抑揚・高下の致す有り。之を另に一灣を轉づる者と較べれば、自ずから別あり。此れ「折」の理なり。論は唐翼修（唐彪）に本づく」（『斯文規範』卷之六・二十一葉・「一曰折筆」条）。

④反點・借點・暗點：『讀書作文譜』に「唐彪 曰く、所謂ゆる反點法は、詞を反書して之を點（要点を示す）ずるを謂うなり。「何以伐爲」（『論語』季氏）〔割注：今不取題〕の如きは李應昇（萬曆二十一年〔一五九三〕～天啓六年〔一六二六〕・字は仲達。江蘇江陰の人。萬曆四十四年丙辰科〔一六一六〕三甲百二十六名の進士）に至りて「危うくして持す可く、顛^{くつがえ}つて扶く可し（危可持、顛可扶）」を以て〔『論語』季氏篇の〕「危うくして持せず、顛^{くつがえ}つて扶けず（危而不持、顛而不扶）」を反點す、是れなり。借點とは、意に借りて題字を襯出（際立たせる）す。題字 已に見われれば、便ち必ずしも再び點せず。陳大士（陳際泰：隆慶元年〔一五六七〕～崇禎十四年〔一六四一〕・字は大士。江西臨川の人。崇禎七年甲戌科〔一六三四〕三甲二百三十一名の進士）の「當在宋也」（『孟子』公孫丑下）の二節文の中幅に云う「孟子 處する所に當たりて戒心無し、齊 詭りて宋の辭を爲して「戒を聞く」と曰えば、孟子 將に之を受けんとするか、孟子

處する所に当たりて遠行無し、齊 詭りて薛の辭を爲して「將に遠行あらんとす」と曰えば、孟子 將に之を受けんとするか、計るに孟子 必ず受けざるなり（當孟子所處無戒心、齊詭爲宋之辭曰聞戒、孟子將受之乎、當孟子所處無遠行、齊詭爲薛之辭曰聞將有遠行、孟子將受之乎、計孟子必不受也）」と、此れ所謂ゆる借點なり、と」（『讀書作文譜』卷之九・九葉）。

もともと題目の要点を示すのは、どの場所でもよかった。しかし、最近ではそのことを知らず、提股の下のところにおいて無理に出題を設けて、點題（題目の要点を示す）することになった。これは、やはり見た目がよくないものである。

三四五六股（中股）については、次のようにいう。

〔三四五六股〕唐彪 曰く、今人の中股に於けるや、毎に起・承・轉・收の法①有りと謂う。則ち起の後は當に承くべし、承の後は當に轉ずべし、轉の後 始めて收む。然れども文は往往にして止だ起・承のみ有りて轉無き者なり。亦た一二句を起こして即ち轉ずる者有り。更に起・承の下 轉を用いずして開法を用いる者有り。翁寶林（翁叔元・明・崇禎六年〔一六三三〕～清・康熙四十年〔一七〇一〕・字は寶林、又は鐵菴。康熙十五年丙辰科〔一六七六〕の探花）の「致知在格物」（『大學』經・第四節）文の中股の「且^{そも}も夫れ天下の物を盡して之を窮め、聖人 固より能くせざる所有るなり（且夫盡天下之物而窮之、聖人固有所不能也）」の如きは、此れ開法なり。惟れ開けば乃ち能く更に一層の議論を出す。若し轉を用いるに^{とら}拘われれば、安くんぞ能く更に一層を發せんや。今人の股法 日々長ずるも、若し此の處に於いて講求（研讀）せざれば、文 未だ能く工みなる者有らざるなり、と（『讀書作文譜』卷之九・九葉～十葉）。

①起承轉合：『斯文規範』に、「一股中に一頭を前に起し、次に承接して之を言い、實意もて^{おわ}完る後、復た^{べつ}另に一灣（曲がりくねった流水）を轉づ。然る後に合わせて題面の上に到るを言うなり……」（『斯文規範』卷之三・二十葉・「一曰起承轉合」条）。

最近の三四五六股（中股）の作法としては、「起・承・轉・收」の法があるとする。しかし、起・承があるだけで轉がないものが往々にしてある。また、一二句を「起」としてすぐに「轉」を行なうものもある。起・承の後に、開法を用いるものもある。

七八股（後股）については、次のようにいう。

〔七八股〕唐彪 曰く、七八股は、或いは題中の深一層の意を發す、或いは題中の下截の意を發す、或いは題中の未だ發するに及ばざるの字を發す、又た或いは前に順闡を用いて後に逆發を用う、前に分疏を用いて後に合講を用う、前に合講を用いて後に分疏を用うるも可なり。又た或いは股首に推原①・推廣②・翻論③を用いて古を引きて襯（際立たせる箇所）を作し、下は題面を以て之を足らすも可なり。又た或いは股の上半截 已に題義を將^もって説き完^{とおわ}れば、下は闡發（解明）す可きもの無し、乃ち推原・推廣・咏嘆④・襯貼⑤と翻進一層等の法を用いて以て其の不足を補せば可なり。又た枯竭題・虚縮題・一字題は、題義 前半に於いて已に説き完^{とおわ}れば、再び發する可き無し。[そこで] 竟に前の五法を用いて二股を作りて、以て其の體裁^{おわ}を完らせば、亦た可なり。又た兩句題及び三四句題は、前の四股 専ら上截を發する者なれば、則ち後の四股は宜しく下截を發すべし。中間は則ち過文⑥を用う。若し三四股 已に下截を發し、五六股 亦た下截を發する者なれば、則ち七八股 必ず宜しく合講すべし。此れ正式なり（『讀書作文譜』卷之九・十一葉）。

①推原：『讀書作文譜』に「〔推原〕唐彪 曰く、推原とは、或いは後面よりして其の來歴を推原す、或いは行事に因りて其の用心を推原す、或いは疑似に因りて其の然る所以を推原す。三者 皆な理の已むを容れざる所有るなり。故に文中 往往之を用う……、と」（『讀書作文譜』卷之七・六葉・「推原」条）。

②推廣：『讀書作文譜』に「〔推廣〕唐彪 曰く、文 後幅に至り、正義已に盡き、以て發揮し難ければ、題外に於いて一層を推廣（推しひ

ろげる)す可し。苟し説き得て關係(関連性)有り・根據有れば、則ち前半の文情 此れを得て愈々振動するなり、と」(『讀書作文譜』卷之七・六葉・「推廣」条)。

また、『斯文規範』に「正意 已に完り、復た其の中に於いて更に推廣し一兩層の意を出すを言うなり。唐翼修(唐彪) 曰く、此の法 最も緊要と爲す。苟し説き得て關係有り・根據有れば、則ち前半の文情 此れを得て愈々振動するなり、と」(『斯文規範』卷之六・二十三葉・「一曰推廣」条)。

- ③翻：『讀書作文譜』に「〔翻論〕唐彪 曰く、文章 翻論に假らざる者有り、翻論に宜しき者有り。淺に借りて以て深に翻す、非に借りて以て是に翻す。翻さざれば則ち是なる者は見え、深き者は出でず。故に翻すに宜しきなり。又た古人の成案(定論)を翻す者有り。古人の否なる者は我 之を賢とし、古人の是なる者は我 之を非とするが如し。理に當れば則ち聖賢の功臣なり。後學の耳目なり。然らざれば、偏蔽の辭を以て其の臆見曲説を佐け[ることになるので]、則ち人非(人の謗り)・鬼責(『莊子』天道：鬼神に罪を問われる)は必ず免れず。才有る者、深く此に戒めざる可からざるなり、と」(『讀書作文譜』卷之七・五葉・「翻論」条)。

また、『斯文規範』に「翻とは、公案を翻すの意なり。此の官 彼の官の案を翻すなり。則ち之を文に通ぜしめるなり。凡そ題中の一定の理解は、此れ公案なり。我 一の見解を偏立し之を翻す。此の官に就與して彼の官の案を翻すと相い似たり、故に之に名づけて翻と曰う」(『斯文規範』卷之七・八葉～九葉・「一曰翻」条)。

- ④咏嘆：『斯文規範』に「一股中の正意 已に完り、下を以て必ずしも實發せず、然れども體裁・神韻の間、猶お未だ驟かに止まる可からざるに似たり、故に咏嘆の法を用いて以て其の餘情を盡せば、則ち體裁舒展し、神韻 悠揚たるを言う。文の人を動かすは、反って前の平

實の處に在らず、此の虚處に在り、又た須く此の法を曉り得れば、特に股中に之有るのみならず、結束の處に至りても、往往 此の法を多用すべし」（『斯文規範』卷之三・二十一葉・「一曰咏嘆」条）。

また、『初學題類文法合編』に「〔詠嘆〕前半 實意 已に盡されば、後半 宜しく實發すべからざるなり。故に詠嘆^{ママ}の法を用いて、以て其の餘情を盡す、或いは反面に就きて感慨して聲情激烈とす、或いは正面に就きて推賛し神韻悠揚とす、或いは後より前に溯りて深く感慕す、或いは彼に借りて此れを證し低昂^{あら}を見わす。之を總じて「餘音嫋嫋として、絶えざること縷の如し」（蘇軾「前赤壁賦」）、皆な題の絃外の音なり。文の人を動かすは、多くは此に在り。其の體或いは整、或いは散、或いは長、或いは短、則ち拘「束」されざるなり」（『初學題類文法合編』下卷・十三葉・「詠嘆^{ママ}」条）。

⑤襯貼：『斯文規範』に「唐翼修（唐彪） 曰く、凡そ文の襯（際立たせる）有るは、金玉の雕鏤を用うる・綾綺の花錦を装うが如し。日用に益無しと雖も、而れども光彩陸離、貴重に入らしむは、端^{まさ}に此に在り。文章 固より必ずしも襯を用いざる者有り。若し當に襯すべき者を襯せざれば、則ち匡廓狹小にして、意味 單薄にして、華瞻（華美華麗）の致す無し。但だ襯するの理は一ならず、或いは目の見る所を以て襯す、或いは耳の聞く所を以て襯す、或いは經史を以て襯す、或いは古人の往事を以て襯す、或いは對面を以て襯す、或いは旁觀を以て襯す、或いは上文を牽引し襯す、或いは下意を逆取して襯す、皆な襯貼なり。文を作るに襯貼を知れば則ち文章 光彩を充滿すること、何ぞ言を待たんや」（『斯文規範』卷之六・十九葉・「一曰襯貼」条）。

⑥過文：『讀書作文譜』に「〔過文〕唐彪 曰く、過文は乃ち文章の筋節（要点・節目）の在る所なり。已發の意 此れに頼りて收成し、未發の意 此れに頼りて開啓す。此の處の聯絡（つながり） 最も

宜しく法を得べし。或いは波瀾を作して數語を用いて轉折（a）して下る。或いは止だ一二語を用いて直捷（一気に）にして渡る。反正・長短 皆な拘〔束〕されざるところなり。總じて迅疾（迅速）矯健（筆致が勇健）なるを要す。免起鵲落（文章を書くのが早い）の勢有れば、^{まさ}方に佳きなり。然らざれば、前後の文 極めて精工なりと雖も、亦た減色（見劣りする）なり、と」（『讀書作文譜』卷之九・十二葉）。

（a）轉折：『讀書作文譜』に「文章 説き到り、此の理 已に盡くれば、再び説き難きに似たり。拙筆 此に至り、技 窮まる。〔しかし〕巧みなる人は、一たび轉灣す。便ち又た^{べつ}另に是れ一番の境界なり。以て許多の議論を生出し、理境 窮まり無かる可し。若し更に進まんと欲すれば、未だ嘗て再び轉ず可からずんばあらざるなり。凡そ更に一層を進め、另に一論を起す者は、皆な轉の理なり。折に至れば、則ち微かに同じからず。折は則ち廻環（循環）反復の致す有り。東より西に折れ、或いは又た西より東に折れるなり。其の間の數十句中に四五の折れる者有り、三四句の一句に一折する者有り。^{たいてい}大都は四五折の後、即ち復た折れる可からず。其の往復合離・抑揚高下の致すは、之を平叙無波なる者に較べれば、自然と意味 同じからざるなり。此れ折の理なり」（『讀書作文譜』卷之七・六葉・「轉折」条）。

七八股（後股）は、題目の更なる深意を述べたり、題目の下の截去された部分の意味を述べたり、題目のまだ明らかにしていない文字をはっきりさせる。その解法には様々なものを用いる。

束股（收股）について、次のようにいう。

〔束股〕梁素治 曰く、束股は一に繳股と名づく。蓋し一篇の局を總じて之を收束する者なり。文義 短しと雖も、筆法 最も緊嚴なるを要し、意思 最も周匝（周到）なるを要す。意を経ざること少なければ、未だ强弩の末

（強弩から発せられた矢も最後には力がなくなるように衰えること）を免れず。其の體 一反一正なる者有り、一賓一主なる者有り、一股東本題一股繳章旨（一服もて本題を束ね、一服もて章旨を繳（提出）す）なる者有り、一股東本題一股逗下文（一服もて本題を束ね、一服もて下分を逗（ひきつける）す）なる者有り、應轉前幅（前幅を應轉す）なる者有り。長題は則ち其の緊要を擇びて之を束ね、餘は畧去す可し。巧搭題は則ち一股もて上截を束ね、一股もて下截を束ね。又た上下截連環交束（上下の截 連環し交ごを束ね）なる者有り、惟だ機に随いて筆を運べば可なり。正束の外、又た題緒の甚だ長く、散行の一段もて、全題を收束する者有り、上文を倒捲し收束する者有り、皆な變格なり。之を總ずるに束股は係れ歸宗（締めくくり）結穴（要点に帰結する）の處、格 同じからずと雖も、務めて精嚴緊鍊を以て主と爲す。束股 刻藝に在りて、間ま畧去する者有り。乃ち文家の偷嬾（怠ける）の法なり。正體に非ざるなり。必ず之有りて乃ち全璧を成す、と（『讀書作文譜』卷之九・十二葉）。

束股（收股）は、全篇をまとめて、決着をつけるところである。文は短いけれども、筆遣いはきちっと引き締め、意味は周到であることか求められる。様々な解法があるが、束股（收股）は締めくくりの要点に帰結するところであるので、周到で嚴密であり、しっかりと文を練ることが重要である。なお、参考書において束股（收股）はよく省略されるが、これは正しいものではない。束股（收股）があつてはじめて完璧なものとなる。

（ii）『學海津梁』

崔學古が編輯した『學海津梁』（康熙三十四年〔一六九五〕序）では、提股（提比）・中股（中比）・後股（後比）を次のように説明する。

……提比は、則ち中比・後比を合わせて共に一局を成す。提比は入路の始めと爲し、須く題〔目〕の筋絡の處を擇ぶべし。一提もて之を掇^とり、之を叩き其の動かんさんことを欲し、之を呼びて其の醒めんことを欲す。然る後

に中比 正撃（正面からつかみとる）を用う可きなり。中比は乃ち腹心の寛大（広く大きい）の處、須く文の錯綜（字句を顛倒させる）變化・夭矯（折れ曲がり）離奇（奇怪）を透發して、姿神（姿かたち）の處を盡し使うなり。然らば須く「餘り有れば盡くさず」（『中庸』第十三章・第四節）の意を留め以て後比を起すべし。後比は乃ち中比を承接して其の餘の意を發する者なり。一篇の英華 多く此の處に在りて之を露わす。若し前面①の文 錦繡の如く、此に至り單薄（手薄）なれば、終に是れ虎頭蛇尾（竜頭蛇尾）にして、全才（才能ある人）に非ざるなり。作者 須く別に新思を展じ、^{べつ}另に異采を標し、閱る者をして名山に遊ぶに山勢 已に盡き、峰 廻り、路 轉じ②、別に洞天（すぐれた景色）を現わしむるが如くせしむべし。[そうすれば] 斯れ能手と爲す。八比 既に完る^{おわ}に至り、又た當に前文を總會（とりまとめ）し、數句を咏嘆③す、或いは後に二小比ありて、氣度（風格） 從容として、理趣（筋道とおもむき） 完具するを覺え、而して大家の手筆と爲るを庶う。股法の前後次第に至りては、起は是れ起（提股）、中は是れ中〔股〕、後は是れ後〔股〕、一定にして亂す可からざる者 固より言を待たず……（『學海津梁』卷二・十三葉～十四葉・「熟法」条）。

①前面：『斯文規範』に「題の前一層、或いは前の兩層より寫くを言うなり」（『斯文規範』卷之三・二十一葉・「一曰前面」条）。

②峯迴路轉：『斯文規範』に「上の一層 既に完る^{おわ}、下の一層 即ち上面の勢いを承けて、^{べつ}另に一番の意思を轉出すること、峯巒（山の峰峯）に遇いて道路無きを苦しみ、身を回して審視し、路 即ち轉出するが如きを言うなり……」（『斯文規範』卷之六・二十二葉・「一曰峯迴路轉」条）。

③咏嘆：『讀書作文譜』に「〔咏嘆〕唐彪 曰く、文章 前半の實意 已に盡くる有れば、後半 再び宜しく實發すべからざるは、理なり。然れども體裁・神韻の間 猶お未だ驟かに止む可からざるに似たるがごとし。故に咏嘆の法を用いて、以て其の餘情を盡くせば、則ち體

裁 舒展（広々とする）にして、神韻 悠揚たり。文の人を動かすは、
反って前半の實處に在らず、而して此の虚處に在り。其の體裁 或いは
長あり、或いは短あり、或いは整あり、或いは散あり、則ち拘 [束]
されざるなり、と（『讀書作文譜』 卷之七・八葉・「咏嘆」条）。

提股（提比）は、中股（中比）と後股（後比）とを合わせて一組となる。提股（提比）は、取っ掛かりであり、題目のポイントを提示して、はっきりさせる。中股（中比）は、中心部となるところで、言い足りないところがあれば残して、後股（後比）につなげる。後股（後比）は、その言い足りないところをはっきりと論述するところである。全体の精華はここで発揮する。作者は、新しい局面が現れるというようにすべきである。また、始めに提股、中は中股、後は後股という順序は一定不変である。

崔學古は、別に提股（起股）・出題（虚股）・中股・後股と收股（束語・結句）とを個々に次のように解説する。

起股 又た提股と名づく。是れ題 [目] の線索（いとぐち）を掛くる處なり。虚籠①は急ぐこと勿きを要す。大約每股 四五句を以て率と爲す。少なければ、則ち三四句なり。

亦た股を用いず、只だ一段を單行し以て起股（提股）に代える者有り。是れ起股の變法なり。亦た線索を清くし、要領を扼（押さえ）し、文勢を振わすを要す。

虚股 又た小股と名づく。是れ題面を出點（題面の要点を示す）する處なり。每股 二句を以て率と爲す。亦た股を用いず、只だ一兩句もて點題する者有り。然らざれば、或いは一二語を頓し、^{まさ}方に題面を點出する者あり。更に點題に就かず、先ず只だ一二語を頓する者有り。

中股 是れ題義を正發する處なり。切實（的確）なるを要す。仍お「餘り有れば盡くさず」（『中庸』第十三章・第四節）の意を留むるを要す。

後股 是れ餘の意を推廊（広げる）するの處なり。另に心思を發し、^{べつ}別に生面（新しい境地）を開くを要す。

起股・虚股・中股・後股は毎項二股なり、故に八股と云う。前人の定めて八股と爲す者は、言の已まず再び之を言い、兩兩 相い比べて、明らかに必ず是の如しと爲して而して後に盡す。合掌（二股が同じような語句を用いて文章を展開する）するが若きは、則ち四股もて足れり。何ぞ必ず八股ならんや。

束語 束語は是れ通篇を收拾する處なり。或いは四句、或いは二句なり。

結句 亦た對句を用いず、只だ散行の數語もて以て題神を詠歎する者有り。皆な束語と爲す。結句は是れ文章の結穴（結び）の處なり。或いは上文を挽き、或いは下文を落し、^{のこ}或いは本題を結ぶ。只だ一二句もて率と爲す（『學海津梁』卷三・六葉～七葉・「入法」条）。

①虚籠：『斯文規範』に「題前に先ず題の大意を虚籠（要約する）を言うなり……」（『斯文規範』卷之六・十六葉・「一曰虚籠」条）。

（iii）『初學玉玲瓏』

古棠の徐瑄（敬軒）の『初學玉玲瓏』（乾隆十五年〔一七五〇〕序）は、提比（提股）・領題（出題）・中比（中股）・後比（後股）・束比（束股）を次のように解説する。

まず、提股（提比）と領題（出題）とについて、次のようにいう。

〔提比〕提比は是れ起講の下初めて入手の處なり。宜しく虚なるべく、宜しく實なるべからず。短きを貴びて長きを貴ばず。然れども虚なるも又た寛泛（広範囲に及ぶ）なる可からず、短なるも又た迫促（接近させる）なる可からず。如し〔題目に〕上文有れば、則ち上文を承けて引き入る。〔題目に〕上文無ければ、則ち本題より反起①・翻起②・襯起③す。或いは是れ全く反逼④を用う、或いは是れ一開一合⑤す、或いは是れ一賓一主⑥す、或いは是れ一反一正⑦す、皆な務めて紆徐⑧なるを要して、入る可し。虚虚

にして本題を籠逗（要点をあつめる）し、恰好（ちょうど）點出すれば、乃ち妙手と稱さる。若し一たび實講を著せば、便ち中〔股〕・後〔股〕の地歩を占め、下面 疊牀架屋（屋上屋を架す）の病を免れず。此れ幼學の當に研心（専念）すべき所の者なり。特に拈出を爲す。○領題（出題）なる者は、題比（提股）を領起するの意なり。衣の領^{えり}（襟）有るが如きなり。或いは是れ反振^{ママ}⑨す、或いは是れ虚喝（虚勢を張る）す、故に題（提）比〔と領題（出題）の〕要緊（重要）と領脈（要点）とは相い接す。題を出だす處は、亦た宜しく層次ごとに醒點するを佳しと爲す。先輩 提比の下に于いて又た二小比有りて、之を虚比と謂う。今の人 或いは用い、或いは用いず。然れども亦た知らざる可からず（『初學玉玲瓏』一冊・三十二葉・「提比」条）。

①反：88頁①参照。

②翻：『初學題類文法合編』に「翻」と「反」とは同じからず。題〔目〕 説くこと此の如く、文 説くこと此の如からずを「反」と曰う。題〔目〕 説くこと此の如く、文 説くこと必ずしも此の如からざるを「翻」と曰う。翻^{くつがえ}し得て開き、纔^{わず}かに跌き得て緊なり」（『初學題類文法合編』下卷・一葉・「翻筆」条）。

③襯：『初學題類文法合編』に「襯とは、彼の物を以て此の物を襯（際立たせる）するなり。題〔目〕 日月を説けば、星辰の類を以て襯を作る。題〔目〕 河海を説けば、江淮の類を以て襯を作る。高一層の襯する者有れば、低一層の襯する者有り。對面もて襯する者有れば、側面もて襯する者有り。畫家の烘雲託月（雲を塗りつぶして月をはっきりさせるように、周りとの対照をきわだたせる）が如き、是れなり」（『初學題類文法合編』下卷・一葉・「襯筆」条）。

④反逼：『斯文規範』に「逼は迫なり。字面 未だ出でざるの先に於いて反筆を用いて以て題中の字面に逼迫するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反逼」条）。

- ⑤一開一合（闔）：『斯文規範』に「前の一股が是れ開、後の一股が是れ闔（合）なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一開一闔（合）」条）。

また、『讀書作文譜』に「〔開闔（合）〕唐彪曰く、人皆な開闔（合）を以て文の要法と爲す。而れども最も知り難き者は開闔（合）なるを知らざるなり。諸家の言う所多く未だ明らかに悉さず。今、反覆細思し、乃ち其の理を得。蓋し開闔（合）なる者は、乃ち諸法の中に對待（相對する）するに於いて、抑揚の致すを兼ね、或いは反正の致すを兼ねる者、是れなり。賓主・擒縱・虛實・淺深の諸法の如きは、皆な對待する者なり。對待する有りて抑揚・反正の致す無ければ、則ち賓主は自ずから賓主なり、擒縱は自ずから擒縱なり、虚實は自ずから虚實なり。開闔（合）と云う可からず。惟れ對待の中に兼ねて抑揚・反正の致す有るは、譬えば水の風に逆らう、風の水に逆らうが如く、一往一來し、激して文を成し、波瀾 出るは、乃ち眞の開闔（合）なり。惜しむらくは、其の理の久しく晦きを。時藝（八股文）論に就きて本股自ら開闔（合）を爲す者有り。二股共に開闔（合）を爲す者有り。四股共に開闔（合）を爲す者有り。通篇大開大闔（合）する者有り。其の法を得る者は、文多く錯綜變化し、縦横離合の致す有り。故に開闔（合）は時藝（八股文）の要法と爲すなり」（『讀書作文譜』卷之七・一葉～二葉・「開闔」条）。

- ⑥一賓一主：『斯文規範』に「前の一股が是れ賓、後の一股が是れ主なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一賓一主」条）。

- ⑦一反一正：『斯文規範』に「前の一股が是れ反、後の一股が是れ正なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一反一正」条）。

- ⑧紆徐：『斯文規範』に「徐徐にして入り、急遽の形無きを言うなり」（『斯文規範』卷之七・三十六葉・「一曰紆徐」条）。

- ⑨反振：96頁③参照。

提股（提比）は、はっきりと具体的に述べず、短くすべきである。題目に截去された上文があれば、それをふまえて論述する。上文がなければ、題目にもとづいて様々な形式を用いて論述する。具体的に論述すれば、中比・後比の内容と抵触し、屋上屋を架すことになってしまう。初学者は注意すべきである。領題（出題）は、提股（提比）を領^うけ起こすの意味である。また、提股（提比）の下に虚比の二比を作ることもある。

中股（中比）について、次のようにいう。

〔中比〕中比は人の腹の如し。空衍（内容が無く浅薄）なる可からず。須く柱を立つべし。分つに應に到底（徹底的に）にし着寔^{たしか}（實）に發揮（論述・展開）すべし。〔そうすれば〕乃ち妙なり。然れども仍お須く餘蘊を留め、以て後二比（後股）の地を爲す。太はだしく説き盡し了^{おわ}る可からず。其の法 亦た起承轉合に外ならず。大抵 起承は反を用い・翻を用い・襯を用い、轉合には則ち皆な是れ正〔を用いる〕なり。但だ虚寔（實）の辨有るのみ。亦た正起反承・反起正承なる者有り。俱に題を相するを以て之を爲す可し。○凡そ兩比の須く柱を立つべき者は、合掌（二股が同じような語句を用いて文章を展開する）を忌むなり。題中に本より柱有る者は、學知行を兼ね、敬 動靜を兼ね、君と臣とは對寫す可し、人と己とは分發す可し。亦た對寫分發す可き無き者有れば、淺深變換・圓通翻轉を妨げず。曲^{つづ}さに其の意を盡すも直率（率直に表わす）膚淺（深みがない）なるは尤も其れ宜しく忌むべし。○中比は題面の字に于いて反挑①有り・正跌有り・倒煞②有り、勢いに随いて之を用い、拘〔束〕されず。層次の若きは醒め出せば更に妙なり（『初學玉玲瓏』二冊・一葉・「中比」条）。

①反挑：『斯文規範』に「挑とは、挑撥（けしかける・そそのかす）なり。字面 未だ出でざる先に反筆を用いて以て題中の字面を挑撥するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十六葉・「一曰反挑」条）。

②倒煞：『斯文規範』に「煞とは、收なり。一股中 上面より已に下面に入り、復た下面より上面に倒抱し、以て收^なを作すなり。此れと後〔で

述べる」の回抱・倒抱等の法とは、名を異にするも實を同じくす……」

（『斯文規範』巻之六・二十葉・「一曰倒煞」条）。

中股（中比）は、内容があり柱を立てて徹底的に論述しなければならない。しかし、説きつくすのではなく、後股（後比）のための余地を残しておく。解法は、起承轉合を用いる。だいたい起と承とには反・翻・襯を用い、轉と合とには正を用いる。また、正起反承・反起正承などもあるが、題目をみてどれを用いるか判断する。

後股（後比）と束股（束比）とについては、次のようにいう。

〔後比〕後比は人の兩大腿の如し。愈いよ有力①なるを要す。昔人 毎に此に于いて壽夭（運命）の窮通（良し悪し）の極を占う。故に苟且（かりそめ）にする可からざるなり。大約、中比の未だ盡さざるの義は、此の處に以て暢發（發揮）す可し。如し中比 分説する者なれば、此に至りて則ち當に合説・互勘・串寫すべし。或いは推開看起す。或いは進歩②し説き來り、或いは推原③を作し、或いは襯墊（当て布）を作り、股尾に至りて題意を正收する・下文を反逗④す・下文を正逗（『斯文規範』巻之六・十六葉・「一曰反逗」条に「逗は、挑逗（引きつける）なり」）す。各様 同じからず、總じて恰も題位（題目の要求）の如くするを以て妙と爲す。○後比の後ろ又た二小比有りて束比と爲す。通篇の散漫なるを收拾する所以の者なり。或いは大意を括し、或いは本題を收め、或いは下意を起す。總じて宜しく道緊（緊張感をもつ）なるべし、宜しく警動（緊張する）すべし、萬として鬆懈（だらだらする）なる可からず。先輩 往往にして此に于いて着意（精神を集中する）す。今人 亦た束比を用いざる者有り。然れども亦た其れ僅かに見るのみ（『初學玉玲瓏』二冊・一葉・「後比」条）。

①有力：『斯文規範』に「力とは即ち文中の力量なり。力 前の法（a）・局（b）・陣（c）・機（d）・勢（e）・氣（f）の六者の外に出でず。蓋し法・局・陣・機・勢の愈々説きて愈々旺^{さか}なると氣中の接落緊湊（密接に連なる）の處とは即ち之を力と謂う」（『斯文規範』巻之七・

四十葉・「一曰有力」条）。

- (a) 「題中の字を刻劃（刻みつける）せんと欲して、直ちに題を説かず、先ず法を設けて以て題を制するを言うなり……」（『斯文規範』卷之七・三十九葉・「一曰有法」条）。
- (b) 「題中の字を刻劃せんと欲して、先ず法を設けて以て開局するを言うなり。局とは、即ち是れ法なり。法を變じて局と言う者は、題中の字を刻劃せんと欲するを以て、須く先ず法を設くるべきこと、猶お局戲する者、人に勝たんと欲して、須く先ず開局するがごときに相い似たり。故に法を變じて局と言う」（『斯文規範』卷之七・三十九葉・「一曰有局」条）。
- (c) 「題中の字を刻劃せんと欲して、先ず法を設けて以て挑陣するを言うなり。陣とは、亦た即ち法なり。法を變じて陣と言う者は、題中の字を刻劃せんと欲するを以て、須く先ず法を設くるべきこと、猶お行軍する者、人に敵せんと欲して、須く先ず排陣するがごときに相い似たり。故に法を變じて陣と言う」（『斯文規範』卷之七・三十九葉・「一曰有陣」条）。
- (d) 「題中の字を刻劃せんと欲して、直ちに題を説かず、先ず法を設けて以て題の機を取射するを言うなり。須く機は是れ法ならざるも、法を離れざるを曉り得べし。蓋し法の中に藏する者なり……」（『斯文規範』卷之七・三十九葉・「一曰有機」条）。
- (e) 「題中の字を刻劃せんと欲して、直ちに題を説かず、先ず法を設けて以て題中の勢を蓄え、話 未だ題上に到らずと雖も、其の勢は則ち是れ題の勢なるを言うなり。此れ即ち局戲する者、其の初め未だ遽やかに人に勝たずと雖も、局勢 既に開き、已に人に勝つの勢有り・[また] 行軍する者、其の初め未だ遽やかに人に敵せずと雖も、陣勢 既に排し、已に人に敵すの勢有る[ことなど]に相い似たり。故に之に名づけて勢と曰う。

機と名を異にするも實は同じ。又た須く法・局・陣・機・勢の五者の其の異を知らざる可からず、亦た其の同じきを知らざる可からざるを曉り得べし。其の異なる者は、局・陣 亦是れ法なりと雖も、然れども已に法を變ずるの名なり。機・勢に至れば、法を離れずと雖も、然れども機は則ち是れ法中の一段の機趣（作品の風趣）を指して言い、勢は則ち是れ法中の一段の形勢を指して言う。此れ其の異なる所なり。其の同じき者は、法の一字もて是れ直ちに之を言う。局・陣の二者は、是れ借りて之を言い、機・勢の二者に至れば、是れ法を言わずと雖も、法 已に其の中に存す。此れ其の同じくする所なり」（『斯文規範』卷之七・三十九葉～四十葉・「一曰有勢」条）。

- (f) 「氣とは即ち文中の接聯（連続する）の氣脉なり。文 必ず氣有りて而して後 一氣の滯る無きこと、猶お人の必ず氣有りて而して後に起坐自如なるがごときに相い似たり。故に之に名づけて氣と曰う。此の所謂ゆる氣と前〔に解説した〕有脉との大別を曉り得べし。蓋し彼（有脉）は是れ題の筋脉を言い、此れ（有氣）は是れ文中の氣脉を言うなり」（『斯文規範』卷之七・四十葉・「一曰有氣」条）。

- ②進歩：『斯文規範』に「股中の實義 既に發するの後、復た一層を追進するを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十九葉・「一曰進歩」条）。

- ③推原：『斯文規範』に「一股中の正意 已に盡き、股尾 更に一番の然る所以を推原するを言うなり。唐翼修 曰く、推原とは、或いは後面よりして其の來歴を推原す、或いは行事に因りて其の用心を推原す、或いは疑似に因りて其の然る所以を推原す。特に股中にのみ有るにあらず、且つ通篇に此の法を用いる者有り……」（『斯文規範』卷之三・十八葉～十九葉・「一曰推原」条）。

④反逼：107 頁④参照。

後股（後比）は、その場しのぎで作成してはいけない。だいたい中股（中比）で言い尽くせなかったことをここではっきりさせる。いろいろな解法があるが、題目の要求に従うことが妙所である。後股（後比）のあとに、二小比で束股（束比）を作る。全体を收拾するためである。大意をまとめたり、題目の内容を収めたり、題目の下文の内容を提起したりする。だらだらしたものではない。

（つづく）